

兵部少輔殿御渡

寶曆甲戌曆差錯有之付而今度於京都改頒宣下有之來午年ヨリ新曆頒行之事

右之通可被相觸候

伊勢御師例年祓配ニ間ニ合不申候斷ニ及月迫漸々出來配り出す

〔曆象考成上編國字解序〕靈元帝時保井春海新造曆法獻之是爲貞享曆曆學至此大明後七十年頒行寶曆甲戌元曆予祖秀長以推步蒙辟職司曆校訂甲戌元曆予父秀升克承祖業嘗獲覽秘府所藏律曆淵源其中曆象考成上下編上說其理下錄其法是書也改正崇禎曆法而其術精要又有考成後編者於前下編中訂舊增新更構一色夷考彼邦曆術無有能出於其右者於是請援據其法而再有改曆之舉乃蒙官准遂與同僚制爲一法獻之賜名寬政曆即今時所用者是也

〔府内備考十三〕頒曆調所○又測量所と云

又いにしへ七政曆あり中古より此法廢れたりしを新にかうがへて七曜曆を作りて奉りければ是より永式とはなりける曆博士幸德井友親よく學曆の吉凶を考へけるも此頃友親東へ下り算哲に其術を學びたりしよりかならず算哲が校合を得て頒行せらるべき由命ありけるとぞ其後六十餘年を歴て○寶曆年中又違ひ有けれどもこたびは改曆の事も聞へず此時佐々木文次郎といふ人所縁の家小日向赤城明神の傍に寓居したりけるが此人天文曆數に委しければひそかに憂ひ執政某の邸へ至りて此事を啓し且いふ我言葉を疑ひおぼさば今年某月朔日蝕すべくして頒行の曆に日蝕のことを載せず此日を待てわがことばの妄ならざる事を驗みたまへと果してその日蝕するをもて登庸せられ改曆の事に預る是寶曆甲戌曆なり後四十四年にして○寬政年中又改曆有て曆數の術本朝の隆盛を極めて天度の違なき此時より過るはあらじ〔續泰平年表〕天保十三年三月十九日改曆之儀被仰出貞享曆寶曆甲戌之曆と各編者之自序有之寬政曆は曆文無之總旨有之候右は體裁不